
めだかボックス～何でも知ってた少年～

勳b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めだかボックス〜何でも知ってた少年〜

【Nコード】

N0147X

【作者名】

勲b

【あらすじ】

『青春に平等なんかありえない』

彼——羽川駿河は『何でも知っていた』

かつてはこの世界全てのことを『何でも知ってた』

今は、自分が興味のあることならば『気が付いたら何でも知っていた』

——そんな彼の物語

——憐れな彼の物語

プロローグ 第0箱（前書き）

『 』があるのに『 』が無いセリフがあるのは仕様です

次の『 』が出るまでそのキャラが話していることになります

もしも、この書き方に違和感を覚えたりしたら教えてください（こ
ういう風に書いたらいいよ、等の意見を教えてくださいたら嬉しいです
！！！）

誤字脱字等教えてくれたら嬉しいです！！

プロローグ 第0箱

夢を見る

—— 彼女の夢を

誰も居ない教室に俺が座っており机には彼女が座っている

「明日からは彼女が生徒会長になるんだっけ」

彼女は楽しそうに言う

「僕としては、彼女と君が組むのは楽しくないんだけどね」

独り言のように

「まあ、君に限って無いと思うけど、浮気はしないでくれよ。君の彼女は僕だけで十分だ」

そんな彼女に言い返す

「……今は違いますよ、俺とあなたは他人だ」

俺が言うと、彼女は悲しそうな顔をする

「酷いこと言わないでくれよ。傷つくじゃないか」

「……知りませんよ」

俺が俯きながら呟くように言うと、彼女は俺の頭を撫でる

「忘れないでくれよ、僕が愛してるのは君だけだ」

彼女——安心院^{あしむ}なじみは俺に優しく言う

——優しい嘘を俺に言う

そんな彼女の嘘を聞いて、俺は目覚める

……今日もやな夢を見た

そんなことを思いながら、制服に着替える

——今日から彼女が生徒会長になるんだっけ

思いだすだけで学校に行きたくなくなる

俺が所属している13組では、登校義務が無いため本来なら行かなくてもいいのだが、行ったほうが面白いことを『知っていた』俺としては行くしかない

俺は大人しく学校に向かった

放課後、俺はおとなしく帰路につく

――が

「何処に行く気だ、駿河」

教室から出てすぐに声を掛けられる

このクラスには駿河という名前の人（というか、クラスには殆どの人が居ないが）は俺しか居ない

俺は声を掛けてきた人を見る

そこには、指定された制服とは違う服装をした彼女――黒神めだかがいた

「……先輩にため口なのはよく無いと思うなあ」

「『私と貴様の関係』には礼儀なんて必要無いだろ」

当たり前のようにめだかちゃんは言っと、俺の手を取る

「……俺とめだかちゃんの関係って何？」

俺の手を取りながら歩きだす彼女に合わせながら俺は聞く

「決まっているだろう」

そう言うと、彼女は足を止めて俺の方を見る

「かつての宿敵だ!!」

……かつての宿敵には礼儀なんて必要無いのか？

「そして、昨日の敵は今日の友つまり、私と貴様は友達だ」

……めちゃくちゃだ

彼女は真顔で俺に言う

恐らくだが、本気で言ってるんだろう

「現に、貴様は『この学校では私の仲間』だからな」

……そう

彼女の言葉を借りるなら、かつての宿敵である彼女だが、この学校では俺は彼女の仲間だ

——でも

「それは、時間限定だけだね」

時間限定とはいえ、めだかちゃんの仲間になるのは嫌だ……

彼が生徒会長を続けてればよかったのに

「……わかってるさ」

「だが、私は嬉しいのだ」

「貴様が私の——時間限定でも」

「私の仲間でいてくれるのに」

「——私は嬉しい!!」

彼女は俺の目を見ながら言う

——光が無い虚ろな瞳で俺の目を見ながら

「……そう」

俺がため息混じりに返事をする、彼女は満足そうな笑みを浮かべて前を向き、歩きだす

先程とは違い、その瞳も戻っている

そんな彼女に聞く

「今から生徒会室に行くの？」

「ああ、やることは沢山あるからな」

「先ずはさ、メンバー集めからやりなよ」

彼女は歩きながら首を傾げる

「メンバー？私と貴様で充分じゃないか」

「……俺は生徒会じゃないから」

「似たようなものだろ、なんだったら、生徒会に入ってもいいぞ、むしろ入れ」

「全然違うから、俺はあくまでも生徒会の手伝いをするだけだし、それに入らない」

俺が足を止めるとめだかちゃんも止まる

「俺は生徒会室に先に行つとくからさ、めだかちゃんは彼を連れてきてよ」

「彼……善吉のことか？」

「そうだよ、彼だったらさ、何だかんだ言いながらもめだかちゃんに付いてきてくれるはずだし」

「……善吉が私に付いてきてくれることを『知ってた』のか？」

「まさか、今の俺は『自分が興味あることしか知ってないよ』、俺

は彼には興味無いからさ、彼の事は何も知らない」

俺が苦笑いを浮かべながら言うと、めだかちゃんは俺の手を離す

「……知ってなくていいさ、貴様は何も」

それだけ言うと、彼女は俺に背を向けて歩きだす

——俺の能力もずいぶんと可愛くなっただな

俺は生徒会室に向かって歩きだす

——口元にのみ薄らと笑みを浮かべながら

ブローグ〜第0箱〜（後書き）

こんにちはーおはようです

普段はヤンデレ書いてます

いやー予告編を短編で書いて投稿したら、私の予想以上に見ていただいたという意見がありましたので投稿しました

めだかボックスは全巻持つてますので、書くのは楽ですね

先程言いましたが、この作品の予告風短編を投稿してますので、興味がある方は見てくれたら嬉しいです！！

PSルビのやり方がわかりません

……説明見ながらやってるのになー

感想くれたら嬉しいです！！

他の作品もよろしく願います！！

ブログ〜第1箱〜（前書き）

総合評価100達成!!

評価してくれた方ありがとうございます!!
今回も短めです

プロローグ 第1箱

——暇だな。

めだかちゃんと別れて先に生徒会室に来たのはいいがやることが無い。

……暇すぎる。

適当に置いてあった椅子に座りながら彼女が来るのを待っていると扉が開く。

「待たせたな、駿河」

「待ちくたびれたよ」

めだかちゃんに続くように彼も入ってくる。

「っ!! あんたは!!」

彼——人吉善吉は俺を指差して言う。

「羽川駿河!!」

「1年ぶりだね、善吉君」

睨んでくる善吉君に笑顔で返事をする。

「何であんたが生徒会室に居るんだ!？」

「何を言ってるのだ善吉、駿河は生徒会役員だから当然ではないか」

「違うから！俺は生徒会補佐であって生徒会役員じゃないから!!」

「生徒会補佐？」

善吉君が首を傾げながら言う。

「生徒会を手助けする人のことだよ、前の生徒会長の仕事を手伝いたかったから去年俺が作ったんだ」

「……てことは、あんたがここにいる理由は――」

「めだかちゃんの仕事を手伝ったためだよ」

めだかちゃんには会長・副会長・書記・会計・庶務の5つの役職全部1人でやっている。

俺としてはずっとそれでいいと思うけど、『あいつ』が関わってくる以上そんなこと言えない。

『あいつ』がこの学校に来るまでには――

「どうしたのだ駿河難しい顔をして」

「……何でもないよ」

黙っていた俺を心配するようにめだかちゃんは言った。

既に善吉君は席に座っていた……俺のことをまだ睨んでるよ。

「……つたく、俺を連れてきた理由をそろそろ教えてくれよ、生徒会長さん」

善吉君は首を押さえながら言う。

……首を捕まれてたのかな？

「駿河がメンバーを集めろと言うからな、先ずは貴様をと思つてな」

「そんなの羽川先輩にでも入ってもらえばいいだろ、何で俺なんだよ、生徒会長さん」

「よそよそしい呼び方をするものではないぞ、昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい！」

凜とした態度でめだかちゃんは言う。

「頼むよ善吉君、それに——」

俺が言つと善吉君は睨むように見てくる。

「俺とめだかちゃんを一緒に居させていいの？」

「っ！—！」

めだかちゃん大好きな善吉君からすればそれだけは避けたいことだろうことを言う。

「それに、めだかちゃんには善吉君が必要なんだ、仕事とかそんなんじゃないってただ善吉君がそばにいてほしいだけなんだからさ」

「!」

善吉君はそれを聞くと顔を赤くしながらめだかちゃんを見る。

「いや、私はする——」

「ほら！めだかちゃんもそい言ってる!!」

めだかちゃんが言い終わる前に被せて言うと、善吉君は更に顔を赤くする。

「そういえば、めだかちゃん目安箱には何か無かったの!？」

これ以上この話を続かないように話をそらすとめだかちゃんから意外な返事が返ってくる。

「うむ、先ほど開いてみたところ早速第一号の投書があった」

「目安箱？……あーあつたなそんなかつたるい」

善吉君はめだかちゃんから目を逸らしながら言う。

めだかちゃんが紙を取り出すと読み始める。

「三年の不良達が剣道場を溜まり場にしていて困っていますどうか彼らを追い出してください——だそうだ」

「はじめにしてはいきなり重いね」

率直な感想を俺は言うと、立ち上がる。

俺に続くように善吉君も立ち上がると言う。

「……結局巻き込まれるのかよ」

「不満か？」

めだかちゃんが言うと善吉君はめんどくさそうに言う。

「今回が最後だからな！」

……素直じゃないねえ。

そんなことを思いながら、俺達は剣道場に向かった。

ブログ〜第1箱〜（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

……全然話が進まない

しかも、今回はヤンデレ要素無しだし

……駄目駄目だな、おい

次回でブログは終わると思います。

PS 総合評価100達成!!

評価してくれた方ありがとうございます!!

ブログ〜第2箱〜（前書き）

総合評価240達成！

PV13000達成！

やっとブログが終わった……

それでは、善吉君涙目な最後のブログをどうぞWWW

ブローグ〜第2箱〜

ここ、『箱庭学園』にはありとあらゆるスポーツ施設が完備されている。

その中でも剣道場は伝統ある建造物として大切にされている――

俺が箱庭学園に入学する前に、夢の中で『彼女』がそう誇らしげに語っていたのを思い出しながら剣道場の門を彼女が開ける。

――その中には柄の悪い人がこちらを睨みながら座っていた。

おおー、怖い怖い。

『彼女』曰くそれは数年前までの話であり、剣道部が廃部になったあとは不良（笑）のアジトになっているとも聞いた。

「あ？誰だアお前ら」

真ん中にいたリーダーっぽいのが言う。

「生徒会だよ」

「目安箱への投書に基づき生徒会を執行する！」

俺が言いめだかちゃんが付加えたとリーダーっぽいのが近くにあった木刀を取り立ち上がるとそれをめだかちゃんに向ける。

「生徒会がこんなところにおいでになるとは驚きだな！支持率98%だが何だか――」

「長い」

俺がリーダーっぽいのに言うと同時にリーダーっぽいのが持っていた木刀が床に叩きつけられる。

「なっ!？」

「駿河!！」

めだかちゃんがリーダーっぽいのがから目線を外し俺を見る。

「良いだろ、こういう奴らは潰した方が早い」

「だが……!」

「傷つかせないようにするから問題ないよ」

それだけ言っただけ俺は前に出る。するとリーダーっぽいのが言う。

「っ! 舐めやがって!! 囲めおめーら」

そついうと不良達が俺達を囲む。

「制服改造に染髪、装飾校則違反のオンパレードじゃねえかよ」

「君がいる生徒会は人のこと言えないだろ」

「俺は生徒会じゃねえ!！」

「奇遇だね、俺もだよ」

善吉君と話ながら俺は右手を上げる。

「まあ、俺は君が生徒会に入るかどうかは『知ってない』けどさ」
そういつて右手を下ろす。

すると、不良達は皆地面に倒れる。

「あんたらの配置は『知ってたよ』」
俺が言うつめだかちゃんが口を開く。

「……駿河」

後ろから俺の名前を呼ぶめだかちゃん。

「怪我はしてないはずだよ。加減もしてるし、相手の服を狙ったから」

それだけ言うつ俺はめだかちゃんの手を取る。

「「ッ!」!」」

めだかちゃんは顔を赤くして善吉君は俺を睨む。

「どうせ今から彼等に稽古を付けるんだろ?更衣室で着替えてきてよ」

「何故だ?」

「……めだかちゃんもつと恥じらいという概念を持つよ」

本来なら生徒会で着替えるはずだったのだが俺が急かしたせいでめだかちゃんはまだ制服だ。

露出癖があるめだかちゃんのことだしほっといたらここで着替えだしそうだ。

そのため、俺はめだかちゃんを更衣室に連れていこうとするのだが――

「……成る程、貴様の考えがわかったぞ」

めだかちゃんは顔を赤くしながら嬉しそうな笑みを浮かべる。

「だが、私と貴様はまだ学生だ

「いや、貴様がよければ私は構わないが――

「私にも心の準備が――」

「そんな準備はいらないから!!」

馬鹿なことを言うめだかちゃんを更衣室に投げ入れると俺はそのまま善吉君に近づく。

「後のことは頼むよ、俺は書類でも片付けとくからさ」

「わーたよ、めだかちゃんには俺から言っとく」

「へー」

「……何だよ」

俺はからかうように善吉君に言う。

「本人が居ないときにはちゃんと『めだかちゃん』って読んでるんだ」

「っ!？」

善吉君はそれを聞くと恥ずかしそうに顔を赤くする。

「まあ、別にいいけどさ 「今度はめだかちゃんのまえで言うといいよ」

「カツ!そんなのごめんだ!！」

強がりと言う善吉君にこの場を任せて俺は生徒会室に向かった。

翌日、俺が生徒会室に向かう途中に彼にあった。

「やあ、善吉君寝心地はどう？」

善吉君は後頭部から血を流しながら地面に俯せで倒れていた。

「善吉君はついてるよ」

俺は動かない彼に言う。

「今の俺は生徒会補佐だ、そんな俺に『たまたま』見つけられたんだ」

俺は動かない彼の手を取り自分の肩に乗せる。

「まあ、今は生徒会役員じゃないけどさ生徒会補佐は困った生徒を助けるのも仕事なんだ」

俺は保健室に歩きだすと善吉君が口を開く。

「……知ってたのか」

「『知らなかった』善吉君に合ったのは本当に偶然だよ
「まあ、善吉君が怪我することは『知ってた』けどね」

俺が言つと彼はぶっきらぼうに言う。

「……そうかよ」

そんな彼と共に保健室に向かった。

善吉君を保健室のベッドに寝かせたあと俺は剣道場に向かった。

剣道場にはぼろぼろになったリーダーっぽいのが目の前の男に竹刀を向けていた。

「勝手なこと吠えてんじゃねえよ

「 たった今思い出したは 「俺は昔剣道少年だったんだよ！

！」

リーダーっぽいのが言っていると周りにいたぼろぼろの不良達も次々にそれに賛同しだす。

それを聞いた男はぶつぶつ何か言っていると木刀を振り上げる。

「剣道三倍段って知ってつか！？」

「僕はあんたらの3倍強いって意味だ！！」

「おおーそれは怖い怖い」

俺が言っていると振り下ろそうとした木刀の動きが止まる。

「！？」

「どうしたの？早く振り下ろしなよ、3倍強い後輩」

俺が言っていると彼は首だけ動かして此方を向く。

「お前は！？」

……全く無知な後輩だな

俺はそんな後輩に優しく教える。

「生徒会補佐だ！」

それだけ言つて彼に右手の平を向ける。

「生徒会補佐？」

「生徒会の関係者かよ

「だつたらスツこんでろよ！」

「学園施設を不当に占拠してる雑草どもをむしってやってんだ
「僕は正しいだろうがあぁン!？」」

彼は叫ぶ。

——無意味な正義を

——自分勝手に

「知るかよ

「俺はお前が正しかろうがなかろうがどうでもいいんだ

「どれもしよせん『彼女』から見たら『くだらないこと』なんだ

「——だから」

俺は右手の平を握る。

「どうでもいい」

握ると同時に彼は倒れる。

「かつ!？」

彼の服は所どころ切れ、身動きをとろうにも指一本動かないだろう。

「まあ、これは今回のぶん」

それだけ言っただけ俺は彼に近づいて足を向ける。

「ここからは、生徒会補佐じゃなくて、可愛い後輩を虐めた分だ」

俺は彼の顔を思いつき蹴る

——心にも無いことを言いながら。

side out

彼、日向は自分の顔を押さえながら校内を歩いていた。

「畜生!」

日向には駿河の靴のあとがくつきりと残っており、それを見られたくないため人気が無い道を通りながら家へ帰ろうとしてるのだ。

「絶対にこのままじゃ済まさねえ！」

「先輩だろうがいつかギツタンギツタンにしてやるぜ!!」

「ん？先輩？」

日向は声がした方を向く。

そこには首を傾げためだかがいた。

「せつ生徒会長!？」

日向はめだかとめが合うと腰を抜かす。

「貴様は今、先輩と言ったな」

めだかは日向に近づく。

「そつそれがなんだよ!!」

「先輩……か」

めだかは扇子で口元を隠す。

だが、口元を隠されていてもわかるくらいめだかは嬉しそうに笑っていた。

「ふむ、駿河はやはり私の仲間だな

「私が不在しているなか剣道部のピンチを救うとは――

「やはり駿河は生徒会に必要なだな

「いや——」

「『私』に必要……か」

光が無い虚ろな瞳で上を見ながら独り言のようにめだかは言うつゆつくり日向に視線を向ける。

「さて、そんな駿河をギツタンギツタンにされないように

「そして、二度と悪巧みなどできないよう

「この私が徹底的に可愛がってやる！！」

楽しそうに笑いながら日向を睨むめだか。

——その日、学園では日向の悲鳴が止まなかったという。

「早速面白いことに巻き込まれたじゃないか」

彼女——あんしんいん安心院さんは机に座りながら俺に言う。

「つか『巻き込まれるようにした』が正解かな駿河はこのことを『知ってた』んだから」

「めだかちゃんと居るのは面白いですから」

俯きながら俺は言う。

俺とは対照的に安心院さんは上を向きながら言う。

「かつて宿敵だったのが次の章では仲間になる

「うん、まるで少年ジャンプみたいな王道じゃないか」

「そうですね」

安心院さんは冷たく返す俺の頭を優しく撫でる。

「駿河は何時になつたら僕に笑顔を見せてくれるのかな

「駿河の笑顔を見るのは僕だけで充分だ

「それ以外は見る価値もない」

安心院さんのそんな言葉を聞きながら俺は目を覚ました。

——今日も最悪な夢を見た

——最悪な夢は明日も見えらう

——何時も道理の最悪な夢を

ブローグ〜第2箱〜（後書き）

こんにちはー勦bでーす

善吉君涙目www

せっかくですしオリ主を活躍させたらこれだよー！

善吉は私的には好きなキャラなのに……

次からは出番増やします（たぶん

さて、オリ主の紹介はもう少し後にしようかと思っています。

風紀委員登場ぐらいに書きたいです。

総合評価200達成を記念しての番外編なども書きたいですね。

番外編はおそらくは過去話になると思いますけどね……

PS次回投稿は少し遅れる予定です

学園編〜第3箱〜（前書き）

総合評価370達成！！

原作2話を書こうとしたらオリジナルの話になっていて書いていた自分でもビックリしました（おい

学園編 第3箱

ここ、箱庭学園の部活動は伝統的にレギュラー争いが激しい。

故に、レギュラーに選ばれたメンバーは虐めに近いものに合うことが多い。

——特に、レギュラーに選ばれなかった先輩が後輩を虐めることも

——
陸上部のロッカーにて1人の女性が周りを見渡していた。

彼女は周りに人がいないことを確認すると作業に移る。

その作業を終え、一通の手紙をロッカーに入れようとする。

——
が

「何してるの？」

「っ!？」

そんな彼女に話し掛ける男が現れる。

「べ、別に何も——」

「隠そうとしても無駄だよ、君がやってたところ見てたし」

彼女はそれを聞いて驚いた表情をする。

「周りは確認したはず——」

「へー、そうなんだ」

男は興味なさそうに言うと、彼女に近づく。

彼女は涙目で顔を青くしながら男を見る。

「君は運がいい」

男は言いながら彼女に近づく。

「今の俺は君に味方したい気分なんだ」

「だから、君にはこれをプレゼントしてあげよう」

「とっておきのプレゼントだ」

男は軽く笑いながら一通の手紙を渡す。

「それを代わりに入れておくといい」

男は先程彼女が入れた手紙を取り出すと彼女に背を向けて歩きだす。

「だ、誰よあんた！」

男は足を止めず、彼女を見向きもせずと言う。

「生徒会の敵……かな」

彼女は男の背から手紙に視線を移す。

その手紙には彼女が持っていた手紙と全く同じ内容だった。

「……なんなのよ、あいつ」

彼女は呟きながらも手紙をロッカーに入れて、部屋を出た。

昼休みになり、殆ど人が来ていない教室で1人淋しく自分で作ってきた弁当を食べようと鞆から弁当箱を取り出す。

……たまには誰かと食べたいな

この学園に入ってから余り人と一緒に何かを食べなくなった気がする。

……と言っても、中学の時は『彼女』が俺と一緒に居てくれたか

らかな。

それこそ、今となつては思ひだしたくもないことだけど。

軽くため息を吐く。

すると、教室のドアが勢いよく開いた。

「探したぞ、駿河」

そう言つとめだかちゃんは一瞬で俺の傍に来た。

「さあ、行くぞ」

「……えっ？ 何処に？」

何も聞いてないんだけど……

「なに、来ればわかるさ」

めだかちゃんはそういうと俺の返事も聞かずに手を取って歩きだす。

……理不尽だ

そんなことを思いながら俺はめだかちゃんに着いていった。

めだかちゃんに着いていった結果、ついた場所は生徒会室だ。

めだかちゃんは席に座ると隣の席を軽く叩きながら扉の前で戸惑っている俺に言う。

「どうしたのだ駿河、早く私の隣に座れ」

俺は言われるがままにめだかちゃんの隣に座る。

「……たしかに生徒会補佐の時間は昼休みも含まれてるけどさ、仕事なら仕事って言うてくれよ」

ため息混じりに言うためだかちゃんは首を傾げながら言う。

「私は貴様と一緒に昼食を取ろうとしたただけだぞ？」

……えっ？

「教室にしてもよかったのだが、それでは他の奴らが邪魔だからな」「生徒会室ならば2人で過ごすことも可能だろうと思い、来たのだ」「なに、善吉には昼の仕事は無いと伝えているから邪魔しにくることはないだろう」

「ここのなら、私と駿河の2人つきりだ」

それだけ言うためだかちゃんは俺の前に俺の弁当箱を置く。

机の上に置きっぱなしかと思っていたんだが、どうやら持ってきて

てくれたらしい。

……都合がいいと言うか、俺が誰かと食べたいと思ったことを『知ってた』んじゃないのか？

そんなことを思いながら弁当箱を開ける。

まあ、俺としてもこの話は嬉しいけど。

めだかちゃんも自分の弁当箱を取り出しとそれを開ける。

「へー、意外だ」

「意外？ 何がだ」

めだかちゃんの弁当箱を見ながら言う。

「いや、重箱とかじゃないんだ」

めだかちゃんの家は金持ちだ。

金持ちの弁当箱と言えば重箱だ（ドラマではだけど）それなのに、めだかちゃんが取り出したのは普通の弁当箱だ。

「普通の日には重箱など使わずがないだろ」

呆れながらめだかちゃんは言う。

まあ、それもそうか

「駿河が重箱で食べたいと言うのなら作ってきてやってもいいぞ」
「？」

「いや、遠慮しとく……っつか、めだかちゃん自分で作ってるの」
「？」

めだかちゃんの口振りからしてそうなんだろう。

これはまた意外だ。

めだかちゃんクラスの人にもなると使用人がいて、その人達がつてくれると思つてた。

「少し前まではそうだったんだがな、駿河に美味しいと言わせれるような料理を自分の手で作るために日々練習中だ」

……何で俺なんだよ。

そりゃまあ、俺のことを思つてくれるのは嬉しいけど……俺じゃなくて善吉君にしてあげればいいのに。

「まあ、料理に関しては駿河の足下にも及ばないが世の中には主夫と呼ばれる人々もいるのだ」

「私が料理を上手く作れなくても、駿河がやってくれば構わない」

「駿河を養うのは私としても苦ではないからな」

「そのかわり、駿河は家から一步も出さないけどな」

恐っ！

何か結婚する前提みたいな話をされてるよ！

確かに一生養われるんだったたら喜んでただけど家から一步も出ちゃいけないんだったらノーサンキューだよ!!

「……悪くないな」

「何が!？」 俺が軽く監禁されるかもしれない未来なんだよ!？」

そんな未来は未来永劫来てほしくない。

「……そうか」

「駿河が嫌がるなら当面の間は止めておこう」

残念そうに言つめだかちゃん。

……本気だったのかよ。

そんなことを思いながら昼飯を食べおわる。

ちよつとめだかちゃんも食べ終わったみたいだ。

「さて、駿河よ」

「これを読んでくれないか？」

弁当箱を片付けているとめだかちゃんに一通の手紙を渡される。

「……これは」

「先程目安箱を確認していたら入っていたのでな、貴様にはこれを投書した人物を放課後ここに連れてきてほしい」

「ちゃんと記名もあるし……わかったよ

「彼女と一緒に来ればいいんだろ」

俺が言うためだかちゃんは立ち上がり満足そうに首を縦に振る。

「くれぐれも私以外の女に現つを抜かすなよ」

……めだかちゃんに現つを抜かしたことも無いけどね

俺もめだかちゃんに合わせて立ち上がると生徒会室を出た。

——今回の依頼は何なんだろうな——

そんなことを考えながら、ゆっくりと教室に向かった。

学園編〜第3箱〜（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

今回はまあ、1話と2話の間の話ですね。

…… 書きたかったな、2話

何でオリジナルの話になったんだろうか自分でも謎です。

PS 次回は短めでいく予定です

学園編〜第4箱〜（前書き）

前回の後書きで短くなる卜書きました。

あれは嘘です。

……だらだらと長くしてしまいました。

学園編 第4箱

放課後直ぐに俺は彼女に会いに行く。

「有明さんはいるかな？」

二年九組の扉付近にいた生徒に聞く。

「有明さんは……いたいた、おーい！ 有明さーん！！」

生徒が言つと彼女が近づいてくる。

「君が有明さんかな」

「えーと……」

いきなり知らない人に呼ばれて戸惑っている彼女を安心させるために俺は言つ。

「生徒会関係の人だよ」

それだけ言つと有明さんの手を取る。

「悪いけど、今から生徒会室にまで来てもらつよ」

「えっ？ えっ！？」

場の状況が把握できてない女性を無理やり生徒会室に連れていく

男がいた。

つつか、俺だった。

「それじゃあ、俺がまず生徒会室に入っただかちゃん——生徒会長と話をするから、少し待ってて」

有明さんを生徒会室前にて待たせ時ながら俺は生徒会室に入った。

「むつ、遅かったな駿河

「依頼者は何処にいるのだ」

「部屋の前にいるよ」

入って直ぐに聞いてくるめだかちゃんに応えろ俺は善吉君を見る。

善吉君は黒い制服な下にジャージを着ており

「デッデビルかけえ!!」

と、騒いでいる。

……相変わらず色々とセンスが残念だ。

「……何やってるの善吉君」

苦笑いを浮かべながら善吉君に声を掛ける。

「反骨精神のカタマリみてーだ！」

駄目だ、聞いてない。

諦めながらため息を吐く。

善吉君は『庶務』の腕章をしており、めだかちゃんがしている腕章にはそれが消えている。

約1週間前にあった剣道場での事件を切っ掛けに善吉君は生徒会に入っただ。

「有明さんと呼ぶのは、善吉君が落ち着いた後でいいよね」

「そうしてくれ」

俺とめだかちゃんは善吉君のテンションが下がるのを待つことにした。

……有明さんにはいい迷惑だろうな。

後で謝罪しておこう。

あれから数分後、善吉君のテンションが元に戻ったため有明さんを生徒会室に招き入れ、今回の相談を聞いた。

有明さんは偉そうな態度のまま話を聞くめだかちゃんと変な（本人曰くデビルかけえ）服装をしている善吉君を交互に見ては不安そうな顔をしている。

「それじゃあ、有明さん例のモノを見してくれるかな」

「相談っていうのはこのことなんだけど……」

有明さんはカバンの中から一枚の手紙と一足のスパイクを取り出す。

「……………酷いな」

手紙を片手にスパイクを取るとめだかちゃんが呟く。

「有明さんは今度ある大会で短距離走の代表に選ばれたんだよね」

「うん、二年生で代表に選ばれるなんて滅多にないことだから凄く嬉しかったんだけど」

嬉しかった

そう過去形ではっきりと有明さんは言った。

俺はめだかちゃんの後ろから手紙を見る。

『リ』『ク』『ジ』『よ』『う』『部』『ヤ』『め』『口』

一文字一文字が新聞の切り取りをはりつけつてある。

「随分長い間愛用していた靴のようだがこんなかとをされては練習がきんのではないか？」

スパイクをじっくりと眺めながらめだかちゃんと言う。

「……今はスニーカーで代用してるわ」

俯きながら有明さんは応えた。

「顧問の先制には話せないだろうね

「問題を抱えている生徒なんかレギュラーから外されるだろうし
「犯人はそれが狙いなんだから」

…… 本人に胸くそ悪い話だ。

俺は俯いている有明さんに近づく。

目元に涙を貯めている有明さんの頭を右手で軽く撫でる。

「そんな犯人と一緒に練習なんかしたくないだろうね

「みんながみんな等しく怪しく見えて誰も信じれないだろうね」
有明さんが安心するように優しく言う。

「でも、安心するといいよ

「この相談は彼女が解決してくれる——」

俺は彼女を見る。

彼女——めだかちゃんは閉じた扇子を有明さんに向けながら堂々と言う。

「駿河の言うとおりだ

「この黒神めだが今日中に犯人を突き止めてやる!!」

「今日中!?!」

めだかちゃんの宣言に善吉君が驚きの声を上げる。

……俺も今日中には驚いたけど。

有明さんを帰すと善吉君が文句を言いだす。

「今日中とかまた大言壮語しやがって」

善吉君はボロボロのスパイクを手に取り、切り傷をみる。

「この程度の材料じゃ犯人の特定なんてまずムリだぜ?」

「そうでもないよ」

善吉君からスパイクを取り上げる。

彼は俺を睨むように見てくるがそんな善吉君を無視して話を続ける。

「まず犯人は陸上部の女子の誰かというのは善吉君でもわかるよね」

スパイクの切り傷を指差して俺は言う。

「実は、このスパイクにも大きなヒントがあるんだ」

「ヒント？」

善吉君は睨むのをやめて俺からスパイクを奪い返すとそれを凝視する。

「駿河、少し来い」

そんな善吉君をほっというめだかちゃんは俺を手招きしながら名前を呼んだ。

そんなめだかちゃんに近づく。

「駿河、私は貴様の優しいところが大好きだ」

考え込んでいる善吉君に気を遣っているのか小声で言う。

「だがな、貴様は私以外に優しすぎないか？」

「厳しくしろとは言わないが、今回のことは流石に無視するわけ

にはいかん」

めだかちゃんは俺の右手を掴む。

——強く掴む

「貴様には後で話がある

「いや、話というよりもお願いだな

「——聞いてくれるよな」

「……聞くよ」

生徒会補佐である俺は生徒会長には逆らえない身の上だしね。

めだかちゃんは満足そうな笑みを浮かべると俺の手を離す。

「さて、善吉よ駿河から貰ったわかりやすいヒントで謎が解けたか？」

めだかちゃんは善吉君に近づいてスパイクを取り上げる。

「……その顔を見るかぎりわからないようだね」

「うるせー！」

ため息混じりに俺が言々と善吉君は逆ギレしだした。

怖い怖い。

「この靴はハサミで切り裂かれておる」

めだかちゃんが善吉君のために答えを教えだす。

「靴をハサミで切るといのは実は結構な重労働でな」

「善吉君でも何も考えずにただやみくもに靴をここまで切り刻むのは大変だろうね」

舐めて言う俺を善吉君が睨むが直ぐに首を傾げて右手を自分の顎に置く。

「でもよ、犯人は女子なんだろ？」

「自慢じゃねえが俺だつて鍛えてるんだから、そんな俺でも大変な作業を女子がやるのか？」

善吉君の言葉に俺とめだかちゃんは同時にため息を吐く。

「善吉よ、それは『何も考えずに』行った場合のみだ」

めだかちゃんの言葉に更に善吉君は難しい顔をしだす。

「ほら、ここをよくみて」

めだかちゃんからスパイクを受け取ると俺は注目してほしい箇所を指差す。

「よく見ると分かるだろ」

「的確に縫い目に刃を入れているんだ、的確すぎるくらいにね」

「これほどまでの確にやれるのは同じ種類のスパイクを愛用して熟知してる人ぐらいだ」

善吉君はポカーンとした表情で話を聞く。

「これを裏付ける証拠としてはこれだね

「ここまで切り刻まれているのにメーカーのロゴには傷一つないんだ

「まあ、犯人はこのスパイクに愛着でもあるんだろうね」

善吉君は表情を変えずただただ聞くだけだ。

スパイクをめだかちゃんに返すと、彼女は俺の頭に手を置きだした。

「ッー!!」

俺と善吉君が驚いているのを無視してめだかちゃんはそのまま頭を撫でます。

「流石は駿河だな

「私が言おうとしたことを言ってくれるとは——
「だが、まだ甘いな」

めだかちゃんの手を払うと俺は言う。

「ハサミのこと?」

「そうだ」

めだかちゃんは俺が払った手を見ながら、少し悲しそうな顔で言う。

「このスパイクは左利き用のハサミが使われておる」

「……何でわかんだよ」

善吉君は俺をまた睨みながら言う。

「ハサミの切り口でわかるものだよ」

からかうように俺が応えとめだかちゃんが手紙を差し出す。

「駿河よ、貴様に頼みたいことがある」

……手紙か

この手紙に関しては俺はよくわからない。

「この手紙に使われている新聞を調べて来てほしい」

「私はこのような記事を使った新聞を見たことが無いからな」

めだかちゃんから手紙を受け取る。

「まあ、知り合いに伝えてくれそうな人がいるからその人に頼んでみるよ」

俺はそのまま生徒会室から出ていった。

めだかちゃんから手紙を借りて俺はある場所に向かった。

「矢文さんはいるかな？」

図書室に入ってまず俺は委員の人に聞いた。

「いつもの部屋にいますよ」

そういつて指差したのは奥にある扉だ。

「ありがとう」

俺はそのまま扉に近づき開ける。

部屋には幾つもの巨大な本棚があり、その中心には椅子に座りながら本を読む彼女がいた。

「君がおねーさんにあいにくるのは久々じゃないかな」

彼女—— 矢文さんは本から目を離して俺を見る。

「今日はお願いがあつてね」

矢文さんに手紙を渡す。

「この手紙につかわれている新聞について教えてほしいんだ」

矢文さんは手紙の裏を見る。

「つまり、『ウラ』にある記事を参考にして教えるということかい？」

流石は矢文さんだ、察しがいい。

「断るよ」

えっ？

「手紙を受け取るときに君から女の匂いがしたんだけど……」

「何で私以外の女と仲良くしてるんだい？」

……匂い？

そういえば、有明さんの頭を撫でたな。

めだかちゃんも相談が終わったならそのことで話があるって言うてたっけ。

「……まあ、君からのお願いを断るわけにはいかないかな」

それだけ言うと矢文さんは手紙を俺に返し、白紙の紙にスラスラと新聞会社、年月、配られた地区、印刷した時間帯をメモした。

矢文さんはそのメモを俺の前に差し出す。

「今度デートに連れていってくれと約束するならこのメモを渡そう」

「いや、そのメモはいらない」

俺は矢文さんに背を向けて歩きだす。

「そのメモの内容は『知った』よ」

……『彼女』に力を弱くされてから不便になったな。

「……残念だよ」

冗談か本気かわからないような口調で矢文さんは言った。

そんな矢文さんの言葉を聞きながら俺は部屋から出た。

めだかちゃんからメールで送られて来た集合場所に俺は来た。

「はい、これが手紙に使われていた新聞の情報だよ」

先程メモしといた紙をめだかちゃんに渡した。

「うむ、ご苦労だったな

「撫でてやろう」

「いらないよ」

そんなことをめだかちゃんと話ながら俺たちは1人の女子を見る。

「彼女が犯人なの？」

「断定は出来ないが、ここまでのめだかちゃんの推理があったらそうだ」

善吉君は彼女を見ながら応える。

「それにしてもドンマイでしたね先輩

「わざわざ意味のない手紙を調べるために働いたなんて」

そんなことをはじめてあう女性に言われた。

「おい！ 不知火少し黙れ！！」

そんな俺を氣遣ってくれたのか善吉君は不知火と呼んだ女性に言う。

「うむ、さっぱりわからん」

後ろにいためだかちゃんが俺が書いたメモをポケットにしまいながら言う。

……わかるはずがない

手紙に使われていた新聞は全て県外のものだった。

しかも統一性の全くないような……

「で、どうすんだよめだかちゃん」

「本人に直接聞くわけにもいかないしね」

まあ、そう言っても意味ないんだろうけどね。

「諫早三年生　貴様が犯人か？」

既に犯人候補であつた彼女の後ろにいたためだかちゃんと言つ。

「！！」

「いや　このスパイクの件なのだが……」

驚きながら後ろを振り向く犯人候補

スパイクを見ながら話すめだかちゃん

驚いたのか何故か背中から倒れた善吉君

腹を抱えて地面に横になりながら爆笑する不知火さん

そんな皆に背を向けて俺は1人で歩きだす。

——次はもつと面白い相談がいいな

そんなことを考えながら——

一足先に帰ろうとしたのだが、めだかちゃんからメールで生徒会室にいろと言われたため大人しく生徒会室で待つことにした。

……生徒会補佐も大変だ。

「待たせたな」

……本当だよ。

生徒会室で待つこと約30分、やっとめだかちゃんが来た。

「犯人は違ったよ、やはりあの手紙が最大のヒントなのかもしれない」

ため息を吐きながらめだかちゃんは俺の前に椅子を持ってきて座る。

「さあ、失敗した私を慰めるといい」

……はあ？

「……………」

めだかちゃんは俯いたまま黙って俺の様子を伺う。

……もしかして。

俺はめだかちゃんの頭をゆっくり撫でる。

「……ッ！」

「これでいい？」

めだかちゃんは驚いた表情をすると顔を上げて俺を見る。

「やっぱり駿河は私のよき理解者だな

「私のやつてほしいことをやってくれて

「私のことを考えていてくれる

「——私も駿河の一番の理解者になりたいな

「……駿河」

愛しそくにめだかちゃんは俺の名前を呼ぶ。

——無理だよ

めだかちゃんじゃ俺の一番の理解者にはなれない。

——『彼女』がいるかぎり

でも、今はめだかちゃんが俺の一番の理解者なのかもしれない。

『彼女』はもういないから。

俺は撫でるのをやめて立ち上がる。

不満そうに此方を見てくるめだかちゃんに手を差し出す。

「下校時間はもうすぐ過ぎるから帰ろうか」

「——ああ」

めだかちゃん俺の手を取るとそのまま握る。

——今日の『彼女』は不機嫌かもな

そんなことを考えながら歩きだした。

目の前の彼女を見ながら。

学園編〜第4箱〜（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

図書委員長登場に何人の人が驚いたかな？

前々から出そうと思っていたため早めに出せてよかったです。

次に出したいのは赤さんこて赤 青黄ですね。

赤さんはヤンデレが似合うはずだから！！

PS 総合評価480達成したしそろそろ番外編でもやろうかなと思ってます。

番外編無しの場合は次は安心院さんのターンです。

夢ゝ第5箱ゝ（前書き）

初めてかもしれないヤンデレ回です。

夢 第5箱

夢の中で目覚めると直ぐに違和感に気付いた。

何時もは席に座っているのに今は床に寝転がっているのだ。

起きようとしても体が言うことを聞いてくれない。

……なんなんだよ。

軽くため息を吐くと『彼女』の声が聞こえた。

「いきなりため息つつうのは失礼だとは思わないのかい」

『彼女』——あんしんいん安心院さんの声を聞いたら俺の首が動くようになつた。

俺は机に座っている安心院さんに言う。

「なんで俺は寝転んでいるのか教えてくれませんか」

安心院さんは笑みを浮かべながら指をならす。

すると、俺の身体中に五寸釘が現れた。

「——ッ!？」

「なに、安心するといいよ（安心院さんだけにね）

「この五寸釘は幻だよ

「ただ、君の自由を封じているのを分かりやすくしたかったただだ」

……幻か

どうりで痛みが無いわけだ。

「それで、なんでこんな幻を見せてるんですか」

意味が分からない。

俺の自由を封じる意味が。

「同じことを何度も言わせないでくれよ
「まあ、君と話せる時間が増えるのは僕としても嬉しいことだからね

「君の質問に答えてあげよう」

それだけ言うと安心院さんは俺を指差す。

「駿河に自由なんていらないだろ

「だから封じた」

……はあ。

「意味が分かりません」

俺が率直な感想を言うと安心院さんは口を開く。

「言葉どおりだよ

「駿河には自由なんていらない

「駿河は何時も僕の言うとおりに動けばいいんだ

「——『昔の君みたいだね』」

ツ!!

俺は安心院さんを睨み付けると、彼女は両手を上げてやれやれと
いった感じで言う。

「そう睨まないでくれよ

「僕は駿河の笑顔が好きなんだぜ

「つーか駿河の表情は全部好きだ

「それはもう顔を剥がして部屋に飾りたいぐらいだね

「まあ、君に睨まれても僕は君からの愛情しか感じないって事だ
よ」

……愛情なんか無い。

それに顔を剥がすって……

剥がされたら俺は死ぬぞ。

安心院さんは机から立ち上がるとゆっくりと近づいてくる。

「駿河、君は知ってるとは思うけど僕は恋愛小説が嫌いだ

「実際に恋愛してみても余計嫌いになったよ

「どんな恋愛小説も大抵最後はハッピーエンドだ

「いや、ハッピーエンドが嫌いじゃないんだ

「ただ、ハッピーエンドになるまでの仮定が嫌いなんだ

「『お互いに離ればなれでも愛しあってる』、『他人から見たら
不幸でも愛さえあれば幸せだ』、『今は自分を見てくれなくても最
後はきつと両思いになる』とかだね

「どれもただのくだらない綺麗事だ

「現実にはあり得ない綺麗事

「そんな綺麗事が僕は嫌いだ

「だから僕は――

「『離ればなれになんかせせない』、『言うことを聞かないなら聞くようにさせる』、『僕のことを見ないなら僕以外の人間を見ないようにさせる』、『僕といて不幸と感じるなら僕以外の人といたらもつと不安と感じさせるようにする』」

安心院さんが俺の近くで止まるといつのまにか持っていた五寸釘を俺の胸に当てる。

「なあ、駿河

「最近君はめだかちゃんと仲が良すぎないかい？

「もしかしたら僕の思い違いかめしれないけど――

「僕がそう思うような行動を取った駿河が悪い

「『君は僕以外のクズと仲良くする必要がない』

「中学の時に言ったのを忘れたのかな

「めだかちゃんはまだしもあの女の頭をなんで撫でたりしたんだい

「頭を撫でるだなんて彼女である僕にすらやったことなかったじ

やないか

「それなのになんであんなクズの頭を撫でたんだい？」

安心院さんは五寸釘を胸に当てたまま言う。

「……別に今のあなたには関係ないですよ」

関係ない話だ。

元力ノである安心院さんには――

俺が言うつと身体中にあった五寸釘が消える。

まあ、身体は動かないけど。

全ての五寸釘が消えるとともに安心院さんは手に持った五寸釘を勢い良く俺の胸に打ち込む。

——ッ！！！！

言葉にできないような激痛が身体中を襲う。

「これはさっきのとは違って痛みを感じるようにしてあるよ
「この痛みで意識を手放さないようにしてあるから安心して痛みを受けるといい」

冷たく言い放つ安心院さん。

何か言いたいにも激痛のせいで上手く声が出ない。

そんな俺を見ながら安心院さんはまた五寸釘を何処からもなく取り出す。

今度は2本で各手に一本ずつだ。

「この両手にも痛みを与えないとね

「君はどちらの手でクズの頭を撫でたのかな

「まあ、どっちにしる二度と僕以外のクズにやらないように両手にするけどね」

言い終わると同時に俺の両手の平に五寸釘が打たれた。

さらなる激痛が俺を襲う。

声を出して叫ぼうにも声が出ない。

ただただ激痛が身体中を走るのを俺は静かに黙って受け止めるしかなかった。

そんな俺の頬に安心院さんは手を添える。

「凄く痛そうだね駿河

「激痛に耐える君の顔も魅力的だよ

「ああ、駿河

「駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河

「やっぱり君だけは手放せない

「君の意思に関係なく僕は君の彼女だ

「なんせ、僕は君のことしか考えたくないぐらいまで君のことを愛してしまったからね

「君だって悪いんだぜ

「僕をここまで病的に愛させるようなことをした駿河が

「僕は駿河に病みつきなんだ」

安心院さんは胸に深く刺さった五寸釘を取る。

「……な……んで」

五寸釘が取れて少しは喋れるようになった俺は言う。

なんで俺なんかを愛すのかを聞き出すために。

「なんでって何がだい」

安心院さんは俺に抱きつく。

「なん……俺が」

安心院さんは顔を近付けながら言う。

「ほら、早く言うんだ

「駿河は僕に何を聞きたいんだい

「駿河が聞きたいことは全部僕が応えてみせよう」

優しく言う『彼女』

そんな安心院さんを見てると心なしが安心する俺はまだ――

「なんでおれをあいすんですか」

やっとの思いで言った俺を見ながら『彼女』は優しい笑みを浮かべる。

「駿河だからさ」

安心院さんは当たり前のように言う。

「僕は駿河のことを深く知ってしまったため駿河を愛するようになっただ」

安心院さんは俺の首筋に顔を近付けながら言う。

「駿河、君の意志は関係ない

「僕は君が好きなんだ

「愛してるんだぜ」

「だから、駿河には僕の傍にいてもらう」

「だから、駿河には自由なんていらない」

安心院さんは俺の首筋を軽く噛む。

抵抗しようにも体が動かない。

数分後『彼女』が俺の首筋から離れる。

「さて、君にこれをやったのは『2度目』だね」

「『一方的な血の契約』
ワンサイドコントラクト」

「この能力は前にも説明したしわかるよね」

……またか。

安心院さんが言うとおりこれをされるのは2度目だ。

「……一方的な契約で契約者の行動を縛る能力でしたっけ」

思い出しながら俺が言うと正解だったのか安心院さんは俺の頭を撫でます。

「駿河の言うとおりだ」

「この『一方的な血の契約』
ワンサイドコントラクトを使って今回は『僕以外の人の頭を撫でることをできなくした』」

安心院さんは俺に顔を近付ける。

「もうすぐ君は起きてしまう」

少しだけ悲しそうに安心院さんは言う。

「……悲しいけど今日はさよならだ」

それだけ言うと安心院さんは俺とキスする。

——動けない俺に

——一方的に

安心院さんは直ぐに離れると嬉しそうな笑みを浮かべている。

……相変わらず一方的な人だ。

俺は最後にこれだけは言っておこう。

「さよなら、安心院^{あんしんいん}さん」

冷たく俺が言うと安心院さんは机に座っていつもどおりの表情で言う。

「安心院さんじゃないだろ

「駿河だけは愛しさと親しみを込めてなじみと言っただ」

そんな彼女の言葉を最後に俺は目覚めた。

両手の平に傷がなければ胸にもない。

……当たり前だ。

あれは夢なんだから。

夢の世界でしか会えない『彼女』

俺のことを愛してくれて、かつては俺の彼女だった『彼女』

……よくわからない『彼女』

だが、これだけはわかる。

俺が『彼女』をなじみと呼ぶことはもう無いだろう。

——今の調子なら、もう無いよ

——あんしんいん
安心院さん

夢〱第5箱〱（後書き）

こんにちはー勦bでーす

一方的な血の契約は私が考えたオリジナル能力になります。

名前を考えるのって大変ですね。

さて、今回はヤンデレ回になります。

ヤンデレになってたかな？

PS 感想くれたら嬉しいです！

学園編〜第6箱〜（前書き）

少しだけセリフの書き方を変えました。

学園編 第6箱

「準備はどうだい？」

学園の屋上にて座り込んでいる男に話し掛ける少年がいた。

「もつと有志が欲しいな。」

あのバケモン女あいてにこれっぽっちじゃ全然足りねえ」

男はため息を吐きながら言う。

「まあ、力づくで彼女を相手にするんなら全然足りないね。鹿屋が思っているとおりさ」

それを聞き男——鹿屋は立ち上がる。

「今、俺はある奴を目につけてる」

「気になるな、誰だい？」

少年は言葉とは裏腹に全く感情が籠もってない。

「人吉善吉だ。」

お前がよく知ってる奴だろ」

鹿屋はそれを言うと歩きだす。

「……彼なら止めておいたほうがいい。
彼は彼女を裏切らない」

歩いていく鹿屋の背を見ながら少年は言う。

「そんなわけねえよ。」

あいつはバケモン女のパシリに使われてるんだぞ」

鹿屋の自信満々な発言にため息を吐きながら少年は言う。

「武器は何時もの人達に渡しといたから、勝手に使つといい」

少年は鹿屋とは反対方向に歩きだす。

「待て！」

そんな少年を鹿屋は止める。

「お前は何でバケモン女の敵をするんだ？」

鹿屋は足を止め少年の背を見ながら言う。

「簡単さ」

少年は足を止めず歩きながら言う。

「俺は『生徒会の敵』だからだよ」

当たり前のように言う少年に鹿屋は何も言わずに歩きだした。

「意味がわからない奴だ」

そう呟きながら。

現生徒会長であるめだかちゃんが設置した目安箱は生徒の間では『めだかボックス』と呼ばれ早くも好評のようだ。

さて、そんなめだかボックスに管理は生徒会庶務である善吉くんだ。

庶務は大変だねー

そして、昼休みにめだかちゃんからめだかボックスの様子を聞くのが最近の日課だ。

めだかちゃんはあの日以来昼休みは俺の教室に来て共に生徒会室で昼飯を取っている。

……『彼女』がこのことに関して何も言わないのが怖い。

「駿河よ。

これが今日貴様に手伝って貰いたいことだ」

今は昼食でめだかちゃんと共に生徒会室にいる。

めだかちゃんが俺の前に一枚の紙を置く。

「これはまた、少し変わった内容だね」

紙を取り俺は言う。

「うむ、本来なら私がやりたいのだが……」

「めだかちゃんには無理だろうね」

俺の一言でめだかちゃんが少し俯く。

……にしても、これはなかなか面倒かもな。

紙を見ながらそんなことを思う。

……めだかちゃんが駄目だとすると善吉くんとやるのかな？

「駿河」

めだかちゃんが短く俺の名前を呼ぶ。

「この件に関しては善吉にも任せている。

これを機に善吉と仲良くするんだな」

めだかちゃんは扇子で口元を隠しながら言う。

……やれやれ。

「わかったよ、めだかちゃん」

それだけ言って俺は立ち上がる。

——善吉くんが俺と仲良くしてくれるかどうかなんて『知らない』

……知りたくも無いけどね。

生徒会室を出ながら今日の放課後が気まずいことにならないことを願った。

放課後、昼休みにめだかちゃんから貰った紙を見ながら善吉くんを待つ。

『探してください』

紙にはそう大きく書かれており真ん中には犬の絵が書かれている。

……俺は犬よりも猫のほうが好きなんだけどな。

ため息を吐くと同時に後ろから声がした。

「駿河先輩！」

俺が声がした方を向くとそこには善吉くと不知火さんがいた。

「3人もいたら子犬一匹捕まえるなんて余裕だな!!」

善吉くんが張り切りながら言う。

……今日はまた一段とテンションが高いな。

何かいいことでもあったのかい？

「それじゃ、早速探そ——」

「「？」」

急に黙った俺を2人が首を傾げながら見てくる。

……やばいな、『知っちゃった』よ。

「ごめん善吉くん！今日はバイトの面接があるんだった!!」

手を合わせて善吉くんに言う。

それを聞いた善吉くんは慌てだす。

「いきなりなんですか駿河先輩!？」

さんな善吉くんを置いて走りだす。

「ごめんね！また今度!!」

……本当にごめんね善吉くん。

もちろん俺はバイトの面接なんか予定にない。

ただ、このまま善吉くん達と一緒にいたら最悪な目に遭うことを
『知った』んだからしかたがない。

だって『知っちゃった』んだもん。

……本当にごめん善吉くん。

俺はゆっくりと帰路に着いた。

翌日、生徒会室にてボロボロの善吉くんの報告を聞く。

……帰ってよかった。

「つまり、善吉くんは不知火さんと犬を発見するも捕獲に失敗し
た上に逃走を許したんだ」

善吉の報告をわかりやすく纏めて言う。

「あれは犬じゃねえ、ワシントン条約で保護されてる狼だ!!」

善吉くんは思い出したのか震えながら言う。

「いや、狼ではなく犬だぞ善吉。

狼狩りのための狩猟犬なのだ。

生半な猛獣よりよほど獣性が高いぞ」

めだかちゃんが冷静に犬について説明する。

そして、その犬にはもう1つ厄介なことがある。

「そんな狂暴な犬が約半年間に成犬して、完全に野生化しちゃたみたいだね」

俺が付け加えるためだかちゃんがゆっくりと傾く。

……予想以上に厄介だな。

こんなことを後輩にやらせるわけにもいかないかな。

「ありがとう善吉くん。

ここから先は俺がやるから善吉くんはめだかちゃんを手伝ってあげて」

俺が言つと善吉くんが驚きながら言う。

「なっ！ 駿河先輩でも1人じゃ無理だ！！」

「大丈夫だよ。

犬相手に遅れはとらないさ。

まあ、1人で無理なら無理で誰かに協力してもらっしよ」

「誰かに協力？」

俺が言い終わると同時にめだかちゃんが立ち上がると俺に近づいてくる。

めだかちゃんが俺の前に立つと善吉くんに聞こえないぐらいの声で言う。

「貴様は誰に協力を頼むのだ？
無論、私だよな。」

だが、万が一駿河が私以外の人に頭を下げるのだとしたら――
許さないぞ。

私以外に頼るなんてな。

駿河が頼るのは私だけで充分だ。

違うか？」

俺の返事を聞かずにめだかちゃんは離れる。

「この件は私が動こう！」

急なめだかちゃんの発言に善吉くんは驚く。

……めだかちゃんが関わったら余計面倒になりそうなんだけど。

「つーかいいいのかよ・相手は動物だぜ？」

善吉くんの言うとおりだ。

めだかちゃんは動物にたいしてトラウマ（善吉くん談）がある。

……余計に面倒になりそうだ。

「構わんさ、私の方の案件は既にあらかたカタがついておるし」

めだかちゃんは扇子で俺を差す。

「何より！ 私の不甲斐なさが原因で駿河が私以外の人に頭を下げるなど我慢ならん！！」

「ッ！！」

それを聞き善吉くんは俯きながら両手を強く握る。

「ゆえに改めて！ 目安箱への投書に基づき生徒会を執行する！！」

めだかちゃんが高らかに宣言して数分後。

俺と善吉くんの前に犬の着ぐるみを着た人が現れた。

「誰だ！？」

俺の分も善吉くんが叫んでくれた。

「当然私だ！」

着ぐるみの口からめだかちゃんが顔を出しながら当然のよう
に言う。

……何でめだかちゃんはこんなにも自信満々なんだろう。

「さて、あやつがターゲットか」

困惑している俺と善吉を置いて1人犬を見るめだかちゃん

「やっぱり止めたほうがいいよ、めだかちゃん。

これぐらいのこと俺と善吉くんでは解決してみせるから」

「駿河先輩の言うとおりだ。

めだかちゃんが無理することじゃない」

俺達2人が言うためだかちゃんが嫌そうな顔で此方を見る。

俺が口を開こうとするとめだかちゃんは犬にむかって歩きだした。

「貴様達はそこで見ておるがよい！

私がいつまでも過去に囚われるような女でないことを証明してく
れる！」

ムキになってめだかちゃんは犬にむかって歩く。

……やれやれ。

「いついっところは可愛いんだけどな。」

「さあ、怖くないぞ」

両手を広げてめだかちゃんは優しく言う。

「撫でてやろう。」

ぎゅっとしてやろう。

一緒に遊んでやろう!」

めだかちゃんが一步犬に近づく。

「だからさあ!

私に貴様を触らせろ!」

その一言で犬は全力で走りだした。

「えっ オッ俺!」

善吉くんが自身を指差しながら驚くと犬は急カーブして隠れるように後ろに回った。

……えっ?

「なあ、善吉くん。俺にわかるように説明してくれないかい」

意味がわからない。

めだかちゃんが動物にトラウマがあるのは知ってたけど……

「簡単ですよ」

善吉くんは犬を優しく撫でながら言う。

「めだかちゃん動物を苦手なんじゃなくて」

俺はゆつくりとめだかちゃんを見る。

「動物がめだかちゃんを苦手なんですよ」

……えっ？

何それ怖い。

ま、まあ、犬は無事に捕まえたんだしよしとしようか。

未だに両手を広げているめだかちゃんから目を逸らしながら、俺はこの場を後にした。

「私を励ませ」

帰路に着こうとした俺だがめだかちゃんから生徒会室に来いというメールをもらったため大人しく生徒会室に来てすぐに俺は言われた。

「……いやだよ」

つーか、着替えろよ。

何時まで着ぐるみ着てるんだよ。

俺が言つとめだかちゃんは涙目になりながら言つ。

「駿河しか私を励ましてくれる奴はいないんだぞ。
前のように頭を撫でるだけでいいのだぞ。
ほら、撫でてくれ」

そついつて此方に頭を向けるめだかちゃん。

そんなめだかちゃんの頭を俺は撫でようとする。

が

動かない。

めだかちゃんの頭を撫でるといふ動作が出来ない。

……当たり前か。

『彼女』の能力で出来なくなったんだっけ。

俺はため息を吐くとめだかちゃんに頭を向ける。

「俺はめだかちゃんの頭を撫でることはできないけどさ、めだかちゃんが犬にやろうとしたことを少しだけなら俺にやってもいいよ」

……俺としても悪くない話だ。

めだかちゃんわ顔を上げると抱きついてくる。

「流石は駿河だ！

私が一番したいことを察してくれるとはな。

ほら、嫌というほど撫でてやろう。

何処までも傍にいてぎゅっとしてやろう。

何時までも一緒に遊んでやろう。

何があるうと傍にいてやろう。

何時までも貴様の隣は私だ。

貴様は私だけ見ている！

駿河は私のことだけを考えてる！

駿河は私のことだけを見つめている」

めだかちゃんはスラスラと言いながら俺の頭を撫でる。

無邪気な笑みを浮かべながら。

——何時までもこんな日常が続けばいいのにな。

そんなことを思いながらめだかちゃんを見る。

——あと何回俺はめだかちゃんの幸せそうな顔を見れるのかな

あと、何回しかないんだろう。

『知らない』

——知らないんだ

学園編／第6箱／（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

次回は安心院さんのターンー!!

……早すぎるだろ。

私ですらそう思います。

ただ、前回以上のヤンデレではないので余り期待しないでください

P S 新連載として『病みつき学園』の投稿を決めました。

これは、めだかボックスのヒロイン達が皆ヤンデレだったら……

という話です。

簡単に言えば私が書いてる病みつき六課のめだかボックス版です

夢ゝ第7箱ゝ（前書き）

安心院さんのターンでもヤンデレではありません。

べ、別に書けないわけじゃ（ry

夢 第7箱

夢の中で目覚めるといつもどおりの席に座っていた。

「にゃー」

……にゃー？

起きてすぐに『彼女』の声が聞こえた。

俺は彼女の方を見る。

——そこには

「やあ、今日も会えて嬉しいよ」

『彼女』はいつもとおりの笑みを浮かべながら言う。

だが、大きな違和感がある。

「おいおい、そんなに僕の顔を見つめるなよ、照れるじゃないか」

顔を赤らめながら言う安心院さんの頭の上には——

「……何ですか、その猫耳」

黒色の猫耳があつた。

俺はそれを指差しながら言う。

「つーか、何で猫耳？」

「駿河は猫が好きだろ。」

だから、猫耳を付けたら喜んでもらえると思ってね。
似合うかい？」

首を傾げながら言う安心院さん。

……素直に可愛いと思った。

「似合ってますよ。」

こんど『あいつ』の前で付けてあげたらどうですか？
きっと喜びますよ。」

めだかちゃんに今度付けてもらおうかな？

猫好きな俺としては猫耳も好きだ。

まあ、猫には遠くかなわないけど。

「彼の前で付ける気はないさ。」

それに、彼は猫耳なんかじゃなくて裸エプロンを強要してきそっ
だしね。

僕の裸エプロンだなんて駿河に頼まれない限り誰にも見せること
はないだろうね」

……裸エプロンって

相変わらずおかしいな趣味を持つてるんだな。

俺がそんなことを考えてると彼女は一瞬で目の前にある机に座った姿で現れる。

「なあ、駿河。

猫耳を付けた僕の言うことを少し聞いてくれないかい？」

安心院さんは俺の返事を待たずに言う。

「僕の今、一番したいことを予想してくれ」

また変なことを言うんだ。

「知りませんよ」

俺が冷たく言うとき安心院さんは俺の右側の頬に片手を当てながら言う。

「それは僕に興味を持ってないからかい？」

まあ、君の能力じゃ僕のことを知ることは不可能だしね。

興味が無いってわけじゃないんだろ。

ほら、ちゃんと考えてくれよ。

君の愛しの僕からお願いだ。

君は喜んで聞くべきだ。

つか、彼氏として当然だろ。

彼女のやりたいことの1つや2つ応えてみせろよ。

さあ駿河、言うてごらん。

僕が今、一番やりたいことを応えるだけだ」

……俺はあなたの彼氏じゃない。

そう言いたいのを我慢して俺は考える。

いきなり何故こんなことを聞かれたんだろう。

……へたに応えるわけにもいかない。

俺は考えを纏めると安心院さんの顔を見る。

俺しか捕らえていなさそうな瞳の彼女の顔を見る。

「外に出る……？」

これぐらいしかわからない。

詳しくは知らないが彼女は夢の中から出られないらしい。

本当か嘘かは知らないけど。

俺の応えを聞くと安心院さんはため息を吐き空いている片手を俺の顔の前に置く。

「はずれだよ」

冷たく俺を見下すように言う安心院さん。

「駿河、なんで君はわからないのかな。

僕がやりたいことなんて何時も君が関わることだけだ。

たしかに外にも出て君と久々にデートにでも出かけたいと思うけど、それは一番ではない。

別に何時かは出られるしね。

デートはその時の楽しみにとっておくよ。

僕が今、一番やりたいことは――」

安心院さんは空いた片手の平を俺に向ける。

「君を殺したい」

冷たく言い終わると同時に俺の首を片手で締める。

「ッ！」

俺が彼女の手を払おうとするが、両手は手錠されており、それぞれ椅子の足に捕まっていた。

「な……で」

なんでそんなことやりたいんだよ！

言いたいにも上手く喋れない。

だが、俺の言いたいことは彼女には伝わったらしい。

「理由は簡単だよ。」

君を殺したら、君は僕以外誰とも関われないだろ。

まあ、死んだ君に僕が関われるかどうかは試してみないとわからないけど、愛さえあれば可能だよな。

ジャンプだったら可能のはずだ。

それに、僕からしたら君と関われないより君が僕以外の女と関わるほうがずっと嫌なんだぜ。

君が僕以外の奴と関わってるって考えるだけで――」

安心院さんはより強く俺の首を締める。

「君と関わった奴を殺したくなる。

でも、めだかちゃんを殺すわけにはいかないだろ。

だったら簡単、君を殺す。

そうすれば君は僕以外誰とも関われなくなるし、君に関わろうとする奴も消えるはずだ」

安心院さんは少しづつつ力を抜く。

「おいおい、そんな顔をしないでくれよ。

君を殺したいけど、それはあくまでも最終手段だつて。

それに、安心してくれよ（安心院さんだけに）君の周りの人を殺すのは『彼女』が最初で最後だ。

そう約束したろ」

「くっ！」

俺は安心院さんを睨み付けると言う。

「戦場ヶ原先輩のことか！？」

「おいおい、そう睨み付けないでくれよ。

そんな駿河も格好いいぜ」

「真面目に応えろ！！！」

「真面目も何もわかるだろ。

彼女は君の言うとおり戦場ヶ原だよ。
もう既に消えたね」

…… 黙れ

「『彼女』のことは誰も覚えてないさ。
友達も先生も部活の後輩も親族も……
皆『彼女』のことは忘れている。
僕と駿河しか覚えてないさ。
邪魔な『彼女』のことなんてね」

「黙れ!!」

戦場ヶ原先輩のことは俺は忘れない！

あなたの能力で消されても――

俺が忘れるわけにはいかない!!

「おいおい、君が言わせといて黙れつつうのは酷くないかい。
それに、もう『彼女』のことはいいじゃないか。
『もう死んだんだからさ』」

…… そうさ

俺が殺したようなもんだ。

戦場ヶ原先輩を……

俺が……

「戦場ヶ原なんて早く忘れちまいなよ。
駿河には僕がいるだろ。
あの頃から彼女の僕が何時でも傍にね」

……あなたは俺の彼女じゃないだろ。

今のあなたは俺の彼女じゃない。

「……楽しい時間は過ぎるのが早いね。
もう君が起きる時間だ」

寂しそくに安心院さんは言う。

「駿河、『一方的な血の契約（ワンサイドコントラクト）で君に
契約したことは覚えてるよね」

……覚えてるよ

誰かを撫でられなくなるのはどうでもいい。

問題はもう1つの方だ。

「この能力は同じ相手に何度も使ったら相手が死んでしまうんだ。
この能力は相手に自分の血を少量入れて、その血が相手の行動を
防ぐんだ。

君の血は既に僕の血が混ざってる。
こう考えたら幸せな気分になるよ。
おっと、嫉妬しなくても大丈夫だよ。
この能力は駿河にしか使えないから。
まさに、駿河に対する僕の愛が作りだした能力と言っても過言で

はない。

話が少し逸れたね。

この能力は使いすぎたら相手——つまり、駿河が死んでしま
うんだ。

ワンサイドコントラクト

だから、『一方的な血の契約』はもう余り使わないようにするよ。
駿河を殺すならちゃんと事前に考えてある手順を使って殺すから
安心してくれ（安心院さんだけに）

ゆえに、能力は使わない。

これは彼女である僕のお願いだ」

安心院さんは黙ると俺に顔を近付ける。

彼女と俺の鼻が触れる少し手前で動きが止まる。

「一生僕の傍にいてくれよ。

そしたら、僕が君のことをぎゅっと抱き締めてやろう。

何時だって君の頭を撫でてやるさ、僕は君の傍にずっといるんだ
から。

未来永劫、君の隣は僕のものだ。

何があるうと、譲気は無い。

めだかちゃんにも

戦場ヶ原にも

——誰にも譲らない」

彼女はそれだけ言っていると俺を抱き締める。

片手で俺の頭を撫でながら。

耳元で囁く。

「本当はキスがしたいけど、『4度目』のキスは君からしてくれ

よ、駿河」

そう言っ て彼女は俺の額にキスをする。

—— 優しく囁いたその口で俺にキスをする

—— 戦場ヶ原先輩を殺した腕で俺を撫で

—— 俺を殺そうとした腕で俺を抱き締め

—— 満足そうな笑みを浮かべた彼女を見る

—— かつての恋人の顔を見る

——

「…… また夢か」

ゆっくり体を起こしながら呟く。

今も『彼女』は俺のことをみてるのかな。

そんなことを思いながら俺は自身の額を触る。

…… 4度目のキスなんかない

——
するはずがない

それぐらいわかるだろ

——
安心院さん

夢 第7箱（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

駿河「羽川駿河だ。得意業は加速装置だ」

お前サイボーグだったの!?

駿河「そんなわけないよ」

ですよー

さて、今回はプレゼントがあります！

駿河「どれだい？」

『ケファイアさん』から頂いた『安眠枕』です！

駿河「これで安心院さんの夢を見なくなるのか……ありがたく本編で使うと——」

本編じゃ余りいいところが無いけどさ、この枕でも使って夢の中でぐらいはゆっくりするといいいよ。

??「カツ！ しょうがないから貰ってやるよ」

駿河「俺に渡さないの!？ つーか、嫌々貰うなら俺にくれよ!」

PSめだかボックスのヤンデレメインになる『病みつき学園』を
投稿しました！！

これからの投稿は何でも知ってた少年↓病みつき学園↓何でも知
ってた少年

と、二週間おきになる予定です。

ですが、病みつき学園のネタが消えたり早めに書ける時間が出来
たりしたら変わります。

結局、不定期更新に変わりはない。

それと、そろそろ過去話を書こうと思ってます。

次話はオリジナルの話を軽く入れる予定です

過去話〜第初箱〜（前書き）

番外編です！

クオリティは気にしないでください！

低くても何も言わないでね（おい

過去話〜第初箱〜

俺は『何でも知ってた』

なーんて言ったら過言になるんだろう。

でも、周りからはそう言われていた。

駿河は何でも知っている。

過去も未来も知っていて、どんな些細なことだろうと駿河に聞けば何でもわかると言われていた。

——わからないさ

——今の俺は、『自分が興味を持ったことしか知ってない』

小さいころから違和感があった。

自分が今体験していることを知ってたんだ。

いわゆるデジャブと言う奴ににている。

そをな体験を何時もしていた。

次第に俺は自分の周りにいる人のことを『知ってた』ことに気付いた。

次第に俺は自分の周りにある物のことを『知ってた』ことに気付いた。

だからこそだろう

『彼女』の存在がとても奇妙に見えたのは

——とても怪異に見えたのは

「羽川」

ホームルームが終了したため、教室から出ようとした俺の名を呼ぶ声がした。

声がした方には机に座りながら大量の紙を膝の上に置いていた彼女が居た。

「どうかした、安心院さん」

彼女、安心院^{あんしんいん}さんに俺は言う。

「いやー、クラスの委員長である僕が先生に仕事を頼まれちゃたからさ、少し手伝ってくれよ」

感情を感じない声で彼女は言う。

『クラス委員長』

俺が『知ってた』どおりに行けば、このクラスの委員長は俺のはずだった。

でも、違う

クラスの委員長は安心院あんしんいんさんだ。

元を言えば、俺が『知ってた』クラスメイトの中には彼女はいない。

こんなのは初めてだ。

だからこそ、俺は彼女を警戒してるし、観察している。

「ごめん、今から部活があつてさ」

2人つきりにはなるべくだがなりたくない。

「おいおい、部活みたいな個人の自己満足なんかよりもクラスを優先だろ」

「バスケ部は自己満足のための部活じゃないと思うけど」

「君がバスケをやってるのは愛しの先輩に褒められたからだろ」

ッ！　なんでそれを！？

「理由が理由なんだから、自己満足じゃないか。
ほら、君は早く椅子に座って僕の仕事の手伝いをするんだ」

「……わかったよ」

ため息を吐きながら彼女の近くに座る。

——イレギュラーな彼女

そんな彼女を観察するために。

「ふう、大分終わってきたね」

安心院さんはそう言いながら残り少なくなってきた紙束を見る。

「……部活間に合わないな」

時計を見ながら俺は呟く。

最も遅れていくぐらいならサボったほうがマシな気もするが……

「おいおい、そんな悲しそうな顔をしないでくれよ。　そんな羽

川にお詫びにコンビニで何か買ってあげよう」

安心院さんは手を止めながら話します。

「コンビニかよ」

「当たり前だろ。　　つか中学生なんだからコンビニでもデンス
ヨン上げるべきだ」

「きゃっほーコンビニだー」

「棒読みで言われると悲しくなるな……」

「なら、なんて言えばいいんだ？」

「きゃっほー！　コンビニだー！！」

「……………」

「うわっ！　反応薄っ！！　好きだぜ羽川ー」

「失礼するわ」

俺が作業に戻ろうとした直後、安心院さんじゃなければ俺でもな
い声が教室に響いた。

「羽川の名前が呼ばれた気がして来たんだけど……
どうやら、ビンゴみたいね」

「戦場ヶ原先輩!？」

突然の訪問者に驚く俺

そんな俺とは違い2人は互いを見つめあう。

「羽川のことを大好きとか言っただのはあなたかしら?」

「ああ、僕だよ。それと、僕のことは親しみを込めて安心院あんしんいんさんと呼びなさい」

「なら、そうさせてもらうわ安心院あんしんいんさん。私のことは敬意を込めて戦場ヶ原様とも呼びなさい」

「断っておくよ、戦場ヶ原先輩」

「あら、残念ね。安心院あんしんいんさん」

残念そんな口振りでは無いんですけど……

戦場ヶ原先輩は俺を指差すと近づいてくる。

「駿河を教室に拉致するだなんていい度胸じゃない」

「拉致なんて大げさなものじゃないさ、ただの隔離だよ」

「あら、そうだったの。私ともあろう人間がついつい勘違いしちゃったわ」

「拉致じゃないから、羽川は僕に安心して(安心院さんだけに)任せて、早く部活にでも戻ったほうがいい」

「いやよ、駿河は今からでも部活に戻ってもらってから」

「羽川はこれが終わったら僕とコンビニに行く約束があるからそれは無理だよ」

安心院さんがそう言うにも関わらず戦場ヶ原先輩は俺の手を掴む。

「コンビニだなんて何時でも行けるじゃない。駿河が部活を終わった後にでもしなさい」

「……なら、そうしようかな」

安心院さんはそう言う俺の方にあつた紙束を自分の紙束に乗せる。

「それじゃ、また後で会おうね羽川」

安心院さんがそう言う作業に戻った。

「それじゃ、私達も部活に戻るはよ」

戦場ヶ原先輩は戸惑う俺の手を引っ張っていった。

「そういえば、戦場ヶ原先輩部活はどうしたんですか？」

教室から少し離れると俺は突然乱入してきた先輩に聞いてみる。

「駿河が部活に来てないって話を聞いたら抜け出してきたの、悪い？」

「いや、悪いだなんて……俺のせいで迷惑を掛けてすみません」

「全く、いい迷惑よ」

「……すみません」

俺は軽く頭を下げる。

この会話を俺は『知っていた』
だから、知ってたどおりに反せばいい。

……楽な人生だ

「バスケ部もそうだけど、陸上部の顧問も小言が煩いのよ。そんな小言を今から聞かされると思うと背筋が凍るわ」

「……うつ」

「全く、クラスなんかより部活を優先しなさいよ。あなたが駄目な子扱いされると私まで駄目な子と思われるかもしれないじゃない」

「思われなと思いますよ」

「駄目な子が尊敬する奴なんてきつて駄目な子なんだわ〜って声が今にも聞こえるわ」

「それはもはや被害妄想ですよ!？」

「そんな駄目な子である駿河に尊敬されるのも嫌いじゃないけどね」

うつ!

……知ってても言われると気恥ずかしいな。

「そ、それじゃ、バスケ部はこっちなんで!」

「待ちなさい」

そう言って今にも駆け出そうとしていた俺を戦場ヶ原先輩は止める。

知っていた内容と違う。

「安心院さんには気をつけなさい」

「……えっ？」

「女のカンよ」

戦場ヶ原先輩は自身気に続ける。

「私の女の Кан は外れたことが無いから、安心して気をつけなさ

い
」

それだけ言うと俺に背を向けて歩きだす戦場ヶ原先輩。

——
気をつけます

そう内心で応えながら、俺はバスケット部の練習場に向かった。

「やっと終わったのかい」

バスケット部の練習が終わり、校門を出てすぐにそんな声が聞こえた。

「待ちくたびれたんだぜ」

何時ものように優しい笑みを浮かべながら彼女——安心院さんは近づいてくる。

「それじゃ、コンビニに行こう」

「本当に待ってたの!？」

「当たり前だろ。羽川との約束を破るわけにはいかないさ」

「……意味がわからない」

出会ってまだ3ヶ月も立たない人との約束なんて簡単に破れるだろ。

安心院さんは1人困惑している俺の手を掴むと歩きだす。

——安心院さんには気をつけなさい

戦場ヶ原先輩の忠告を思い出す。

……流石にこんな時間まで待っててくれた人に冷たくするわけにはいかないよな

俺は安心院さんに合わせて歩いていった、

コンビニに向かう途中、安心院さんは口を開く。

「そういえば、駿河は僕のことどれだけ『知ってた』んだい？」

「……どういう意味？」

「おいおい、僕に隠し事なんてしなくても大丈夫だよ」

そう安心院さんが言つと互いに足を止める。

「君のスキルは僕は既に知ってるよ」

「ッ!？」

なんで!？

このスキルのことは戦場ヶ原先輩だつて知らないんだぞ!！？

「面白いスキルだね、欲しいぐらいだ。本人の意志に関わらず物事の全てを『知つてしまふ』スキル未来も過去も全てだなんて実に強力なスキルじゃないか」

「なんで知ってるんだ!？」

「ん？ それは僕だからだぜ」

意味がわからない!!

「まあさ、落ち着けて。羽川のスキルじゃ僕のがわからないだろ？ それは僕が規格外な人外だからだ。覚えておくとい、君のスキルは強すぎる力を持つものには使えない。使えてもその時知ったことはすぐに変えられてしまふ。そのスキルの弱点だ」

まるで何でも知っているように安心院さんはすらすらと言つ。

「そんなスキルを持った感想を僕に聞かしてくれないか？」

安心院さんは何時ものように優しい笑みを浮かべながら言つ。

感想？

そんなもの――

「最悪だよ」

俺はこんなスキルいらない。

安心院さんはそれを聞き固まる。

そんな彼女の希望どおり感想を言う。

「このスキルのせいで生きることが飽きてくる。

何があるうと知っていて、何が起きようと知っていた。

そんな人生楽しいか！！？

楽しいと思うか！？

このスキルのせいで人生がつまらない！

何があるうとこのスキルで知ったとおりに動けばいい。

違う行動をしてもすぐに結果を知ってしまうんだぞ

まるで操り人形だ

ただただ指定されたように動くだけの操り人形

考えても無駄、行動しても無意味

そんな人生を歩んできたし、これから歩しかないんだ

こんなスキルを持って生きてくと考えたら死にたくなってくる――

――

「なら死ねよ」

安心院さんは冷たく俺を睨むと、これもまた冷たく言う。

「あーあ、面白いスキルを持つ奴だと思って少しは期待してたのに、裏切られた気分だ。

こんなクズにこんな能力はいらないね。

僕にくれよ」

安心院さんが一歩近づいてくる。

「いないなら貰ってやるから」

そう言っ てまた一歩

「僕に安心して渡すといい」

また一歩

——俺は

俺はゆっくりと一歩下がった

そんな俺を見ると安心院さんは再び優しい笑みを浮かべた。

「うん、結構だ。そのスキルは羽川のものだ大事にするといい」

そう言っ と安心院さんは足を止める。

「……さっきから何がしたいんだ」

行動理由がよくわからない。

「なーに、そんなスキルを持つ君のことを詳しく知りたくなっただけだよ」

詳しく知りたくなっただって……？

別に俺のことなんて関係ないだろ。

「やっぱり僕は羽川のことを気に入ったよ」

それだけ言つと安心院さんは俺に再度近づく。

「うん、暫らくは君のことを観察しておこう」

彼女は俺の手を取ると歩きだす。

「まずはコンビニが優先だけだね」

俺は彼女に合わせて歩きだす。

——よくわからない彼女

——知ることをできない彼女

——そんな彼女に興味を持ち始めた

——それが、悲劇の始まりとも知らずに

愚か者の人形劇が始まった。

過去話〜第初箱〜（後書き）

こんにちはー勦bでーす

番外編は過去話ということもあり、駿河には『ケフィアさん』から頂いた『快眠薬』で久々の楽しい夢を見てもらたっています。

駿河「……………zzzz」

本編では最悪な夢を見る分、過去話ぐらいでは幸せな夢を見てほしいですね。

安心院さんが出てくる夢なんて幸せ以外のなにものでもないと思いますが。

さて、今回登場した『戦場ヶ原』はとある作品のキャラです。

わかる方いるかな？（既に感想でわかる方から多数コメントもらいましたがwww）

PS病みつき学園で江迎ちゃんを登場させたらこの作品でも書きたくなりました。

つーか、ぶっちゃけ江迎ちゃんヒロインの病みつき短編が書きたいです。

4千文字ぐらい江迎ちゃんがセリフのwww

学園編〜第8箱〜（前書き）

善吉君が始めて活躍します！

後書きにて重大なアンケートがあるため皆さん見てくださーいね！

学園編 第8箱

「今日も体験入部に行くのかい？」

朝、嫌な夢を見た後、登校中に見かけた善吉君に俺は話し掛けた。

「朝から合うのは久しぶりっすね駿河先輩」

「そうだねー」

俺は善吉君の横につき彼に合わせて歩いていく。

「今日はボクシング部に行くんですけど、駿河先輩もどうですか？」

「冗談。俺が運動出来ないこと知ってるだろ」

俺が出来るのは精々壁走りぐらいだ。

「それに、俺みたいな平和主義者には不釣り合いな場所だろ」

善吉君は苦笑いしながら「何処がだよ……」と呟いたが聞かなかったことにしてあげるよ。

「今日がボクシング部ってことは明日は柔道部かい？」

柔道部なら付いていこうかな。
久々に彼にも会いたいし。

「あー 柔道部は行かないんで、明日からは格闘球技を攻めてみる予定です」

善吉君は頬を掻きながら気まずそうに言う。

彼に会いたくないのかな？

「そっか、でもさ、程々にしときなよ。近頃善吉君のこと噂になってるんだからさ」

「噂？」

気付いてなかったのか善吉は首を傾げて俺に訊ねてきた。

「どんな噂っすか？」

「『生徒会の部活荒らし』だよ」

善吉君はそれを聞きため息を吐く。

「まだそんなもんかよ。もっと強いニックネームが欲しいぜ」

……強いニックネーム？

善吉君のセンスからして『デビル強い生徒会の部活荒らし』とかかな？

「まあ、何にせよ気をつけることだね。善吉君は様々な意味で『有名人』なんだからさ」

意味深にそれだけ言って俺は善吉君を置いて歩いていった。

「もっと強くないと、アンタにもあいつにも負けないぐらい……！」

善吉君の言葉を聞きながら、俺は学園へと早足で向かった。

昼放課、何時ものようにめだかちゃんと昼食を取っていると俺は急に『思い出した』

「？　どうかしたのか、駿河」

急に立ち上がった俺を首を傾げながら見るめだかちゃん。

そんな彼女の手を取る。

「今から面白いことが起きるから行こう」

善吉君が何かやらかすらしい。

俺はめだかちゃんを連れて屋上に行こうとする。

——だが

「嫌だ」

……え？

今、なんて――

短く言つと俺の手を取り引つ張る彼女。

急に引つ張られてバランスを崩した俺はめだかちゃんに向かって頭から倒れた。

ちよ！

何で！？

めだかちゃんは倒れた俺の頭を自分の胸に押しつける。

やっぱり『彼女』よりあるな。

って！

そんなことじゃなくて！！

「急に何を――」

「駿河」

遮るように俺の名前を言つめだかちゃん。

「やっと駿河から私の手を取ってくれたな。
駿河から私の手を取ってくれて嬉しいよ」

そういつて俺の頬を両手で優しく包むとめだかちゃんの方に視線を向けられた。

めだかちゃんにしては珍しく頬が少し紅潮している。

「何時も私の傍にいるもの誰もが私の手を取ろうとする者はいなかった。」

だが、駿河は違う。

中学時代のあの時から駿河だけは違っていると確信していた。

駿河はきっと私の手を取り、私の傍にいてくれると――

駿河

貴様だけだ

貴様だけが――

私の――

めだかちゃんはそれだけ言っていると昼放課中ずっと俺の頭を撫で始めた。

……ごめん、善吉君

でも、俺は君が話したこともそれからの行動も『知ってたことを思い出した』から、安心してくれよ。

俺はめだかちゃんのされるがままになりながら、心の中で善吉君に謝罪していた。

放課後、めだかちゃんには善吉君と共に用事があるとメールで説

得しとき、俺は学園にあるとある教室へと出向いた。

「ピンチみたいだね、善吉君」

柄の悪い人達が武器を持ちながら善吉君を囲んでおり、当の本人は俺を見て驚くことなく静かに睨む。

「駿河先輩、あんたも黒神めだか襲撃計画に参加してんのか？」

「おいおい、生徒会補佐の俺がそんな計画に参加するはずないだろ」

柄の悪い人達は突然の俺の登場に警戒しているのか、キツく睨んでいた。

「こわいなー」

「それにさ、朝に言つたら」

未だに睨んでくる善吉君の隣に立ち、俺は静かに手を挙げる。

「俺は平和主義者だつてさ」

手を下げると同時に一人をのぞき柄の悪い人達が倒れだす。

「カット！ 知ってただけかよ　つか、あんたの行動は間違いないく平和主義者じゃねえ！！」

「ああ、『知ってた』だけさ」

善吉君は視線を俺から立っている男に移す。

「な！ 何なんだよてめーら！！」

「生徒会役員と」

「生徒会補佐だよ」

「駿河！ てめーは生徒会に不満があるんじゃないのか！！」

俺に指差す彼

どうやら相当追い詰められたらしい。

……不満なんて

「おいおい、初対面の相手にそんなこと聞くなよ」

初対面なんだからさ。

つか、何で俺の名前を知ってるんだ？

「人吉！ あんなバケモン女のパシリやらされて不満はないのか
！！」

「不満なんてないですよ」

善吉君はゆつくりと彼に近づく。

「鹿屋先輩、なりたいまのくらいあるだろうって言うてくれましてよね」

鹿屋先輩と呼ばれた彼は近くにあった武器を取り、善吉君に向かって駆け出した。

「俺は、めだかちゃんを守る奴になりたいんですよ」

善吉君は静かに――独り言のように言う。

「だから」

武器を振り上げた彼の腹を力の限り蹴る善吉君。

「俺はあんたよりも強くなってみせる！ 羽川駿河！！」

俺を睨むと善吉君は宣言した。

…… 中学時代からだ

善吉君は俺を目の敵にしはじめたのは。

―― 中学時代のあの時から

「そのために瞳先生――君の母親から、蹴り（サバット）の基礎を学んだのかい？」

今の蹴りからして間違いないだろう。

「ああ、俺には越えなきやいけない壁が沢山ありますから」

善吉君は此方を向くと俺を指差す。

「駿河先輩、あをたが俺達に、いや、めだかちゃんに私的に協力してくれるなんて思ってもねえ」

……まあ、そうだけと。

俺が君達生徒会に協力してるのは『彼女』のためだ。

『彼女』をこれ以上好き勝手にはさせないため。

「それでも、めだかちゃんを悲しませるようなことをあんたがやったら――」

善吉君は一旦溜めるとまたもや宣言する。

「今度こそ許さない!!」

……甘いねえ

善吉君、君は本当に優しすぎる。

「肝に銘じとくよ」

それだけ言っただけ俺はゆっくりと部屋を出る。

さつきから携帯のバイブが働きっぱなしなことを考えるとめだかちゃんがご立腹なんだろう。

「それと、お母さんがそろそろ晩飯食べにこいつて言ってたな」

「瞳先生が？」

「駿河先輩のことかなり心配してるからなあ、お母さん」

「……今度遊びにいくよ」

たまには瞳先生に会いたいしね。

善吉君と談笑しながら、俺達はゆっくりとめだかちゃんがいる生徒会へと向かった。

学園編〜第8箱〜（後書き）

こんにちはー勦bでーす

いやー、今週は投稿する気なかったんですけどねwww

さて、今週投稿したのは幾つか理由があります

活躍報告にも書きましたが、2週間近く連載の更新が出来ないからと

重大なアンケートがあるからです。

私が書いている『病みつき学園』にて『TS球磨川』の試作品を書きました。

書いてて思ったのですが、何でも知ってた少年にめTS球磨川を書いてみたいんですよ。

そこで、皆さんにアンケートです。

- 1、TS球磨川書いて原作崩壊させちまえよwww
- 2、TS球磨川とか誰得だよwww 原作通りに進めろ
- 3、TS球磨川がヤンデレならゆるす
- 4、男の球磨川がヤンデレで、駿河を（ry

以上から選んでください!!

P S 球磨川先輩いつ書けるんだろうなー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0147x/>

めだかボックス～何でも知ってた少年～

2011年12月3日16時52分発行